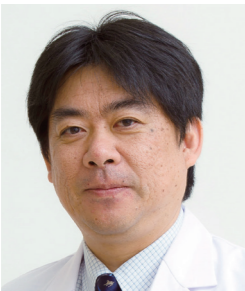


がんゲノム医療の未来像⑤ 増える治療の選択肢

〈広告〉

企画・制作／愛媛新聞社営業局



国立病院機構四国がんセンター
消化器内科医
仁科 智裕
1971年兵庫県赤穂市生まれ、96年岡山大学医学部を卒業し岡山大学第一内科に入局（現消化器・肝臓内科）。香川県内の公立病院勤務を経て、98年国立病院機構四国がんセンター内科に移り、2012年より現職。愛媛大学医学部臨床教授も務める。日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医。

新しい治療法を開発する際、効果や安全性などを確認するために患者に対し行われる研究を「臨床試験」といいます。がん治療には臨床試験で有効性及び安全性が証明された、現時点で最善の治療といえる「標準治療」があります。保険診療で認められている標準治療がある患者には、標準治療が優先して行われます。

専門家会議で治療を検討

「がんゲノム医療」による治療は、まず多数の遺伝子を同時に調べる「がん遺伝子パネル検査」を行います。2019年6月に2種類が保険承認され、四国がんセンターでも検査ができる体制を整えています。保険診療での検査は標準治療がない、または終了したなどの条件を満たす場合に行われ、がんゲノム医療中核拠点病院や同医療拠点病院の専門家会議で適した治療があるか検討されます。その結果を主治医が患者に説明し、治療を選ぶこととなります。がんゲノム医療の効果が期待される遺伝子異常が見つかり、異常に応じ効果が期待できる薬がある場合は治療の選択肢が増えます(図)。ただ、検査を実施しても効果が期待される薬が見つかる患者の割合は10~20%しかなく、今後の課題です。

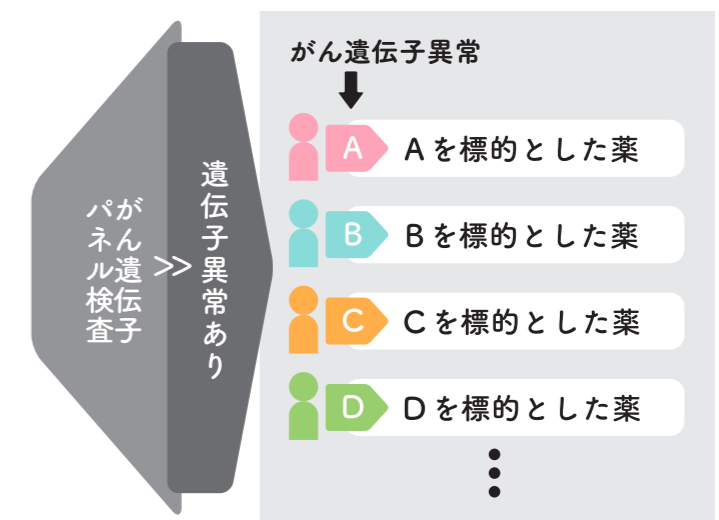
治験に参加可能なことも

がんゲノム医療では主に「分子標的治療薬」を使います。体内の特定の分子を狙い撃ちし、機能を抑えることでより安全、有効に治療するために開発されました。有効性が示され保険承認されているものも多数ありますが、現在も開発のために多くの「治験」が行われています。治験とは保険承認を得るため、これまで使われたことのない薬や、その疾患では使われたことのない薬で行う臨床試験です。四国がんセンターはさまざまな治験を行っています。がん遺伝子パネル検査の結果、治験に登録が可能と考えられる場合、治験について主治医が説明します。また、他の病院の治験で適したものがあれば紹介します。

「患者申出療養」が開始へ

遺伝子パネル検査をして効果が期待できる治療薬が見つかりながら、治療が受けられない患者(希少がんや治験の適格基準を満たさないなど)も少なからずいます。その場合に治療が可能となる「患者申出療養」が整備されつつあります。未承認の治療法を、患者の申し出により臨床試験として実施する制度です。がん薬物療法に関しては、国立がん研究センター中央病院が事務局となり、全国のがんゲノム医療中核拠点病院11施設

遺伝子異常に応じた最適な治療の選択

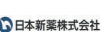
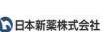


で行う多施設共同研究として、ことしから始まる予定です。がんゲノム医療は、それぞれの患者に最適な治療を提供することが最終の目標です。始まったばかりで課題が多くありますが、今後、体制整備がさらに進むことが期待されます。



四国紙販売 住友生命保険相互会社松山支社・新居浜支社
愛媛大学医学部附属病院肝疾患診療相談センター
読売旅行松山営業所 アウトドアーズ・コンパス

[特別協賛]



【協力団体】協力／愛媛県議会がん対策推進議員連盟、NPO法人愛媛がんサポートおれんじの会、一般社団法人がんサポーターズ、認定NPO法人ラ・ファミリエ

監修・協力／独立行政法人国立病院機構 四国がんセンター